

「うだつは上らないよ」

豊子

ある處に精作と云ふ男がありまし
た。雨か降つても風が吹いても。少
しも怠けないで毎日くよくよく働い
て居りました。けれどもいつも貧乏
で着物は破れ家は倒れかゝって居
ました。

或るお天氣のよい夕焼のして居る日海岸の景色を眺めながら仕事場から自分の家へ歸らうとして居ると、是は不思議、何だか海の波の上に黒いものが歩いて居ます。そしてだんく陸の方へ來る様です。精作は何だらうと思つて暫く立つて見て居ましたが、やがて砂へ上がったのを見ると、犬の様な猿の様な、そして誠に穢ならしい獸でした。精作は變な動物もあるものだと思つて見て居ると、是は又不思議、其獸が口をききました。そして

「おい／＼精作さん、お前さんは、何をそんなに、ぼんやりして居るのです？」と云ひました。

精作は驚きながら、

「私は今家へ歸る處さ、けれどもお前は一体何だへ」と聞きますと、

「私はね、うだつ
と云ふものです
が、宿なしで困っ
て居るのです一
所に連れて行っ
て下さいな」と云
ひました。
そこで根が深切
な精作ですから
「いゝともく」と
云つてやがて破



れかゝつた家へ
歸り、そして自分
の食べる御飯の
半分を分けて遣
りました。是から
毎日、可愛が
るて仲よくくら
して居りました。
或日の仕事事が
久しぶりの休み
で精作は朝から

家に居ったので御米を買ふお錢がなくなつてしまいましたから、
「おい／＼うだつ！今日は仕事も休みで晩の御飯を買ふお錢が
ないが困つたね、お前も嘸飢じいだらうが仕方がない明日迄我慢
してお呉れよ」と云いますと、うだつは平氣な顔で、

「なあにお錢なにか入りませんよ。私の居る中は手さへ三つ叩け
ばあなたの好きなものが目の前に出て來ます」と云いますから、
「それはきたいだね夫れちや此處で暖かい焚き立ての御飯とお
刺身とを出してほしいな」と云いますと、

「え／＼幾らでも出して上げます。さあ手をお叩きなさい」
「そーか夫れは嬉しい、夫れちや叩くよぼん／＼」と叩くと是
はまあ美味そーな焚き立ての御飯と刺身とがきれいに其處に出

ましたので二人は喜んで之を食べました。さあ斯うなると精作も欲が出て、

「僕の着物がきたないから新しい着物がほしいな。ほんくく」と叩くと着物が出る、

「やあ新しい着物が出たぞ有難いな。今度は何にしやうかな。あ、そーだ家が壊れ掛つたから此家をもっと立派にして貰ひたいなちよんくく」と叩くと今迄のきたない家は何處かへ行つてしまつて夫れはくきれいな御殿の様な家になりました。

「やあーきれいになつたく、是れでまあ心持がよくなつた」と喜んで居ました。さあ斯ふなると今迄勉強家であつた精作も段々怠けて来て、しまいには仕事にも行かず働きもしないで唯ぶらく

と遊んで許り居りました。そして始めは何とも思はなかつたウダツが何だかイヤになって、

「ウダツはいつもくきたない獣だなあ、それにお客様が來ても誰が來ても構はずに歩きまわるものだから皆んな嫌がつて歸つてしまふ。赤ん坊などは恐はがつて泣くぢやあないか、仕様がないなあ」とこぼして居ました。そして或日の事不意に思ひ付ひて

「いゝや、く犬小屋の様な箱を作らへて逐ひ込んで置け」と遂々動物園の猿見た様に箱詰めになれてしまひましたのでウダツは出て遊ぶ事が出来ません。

「精作さんはひどい人になつたなあ。折角僕が斯んな立派な家やあんな立派な着物やそれから美味しい御馳走を出して遣つて居



らない中に海の方へ行かう」と思つて驅けて行くと丁度向から精作が歸つて來ましたので、

「やあ是はしまった。と後歸りして横町から抜けて逃げ出しました、するとそれを見付けた精作はやあ大變だウダツに遁げられて堪まるものかと後を逐ひかけながら、

るのに僕を斯んな處に押し込んでしまつた。いゝや僕は今に遁げ出してしまふやと獨り言を云つて居ましたが或日の事精作が外に出て散歩して居る中に一生懸命箱を破つて遁げ出しました。

うまいぞ遁げ出して遣つた。早く見付

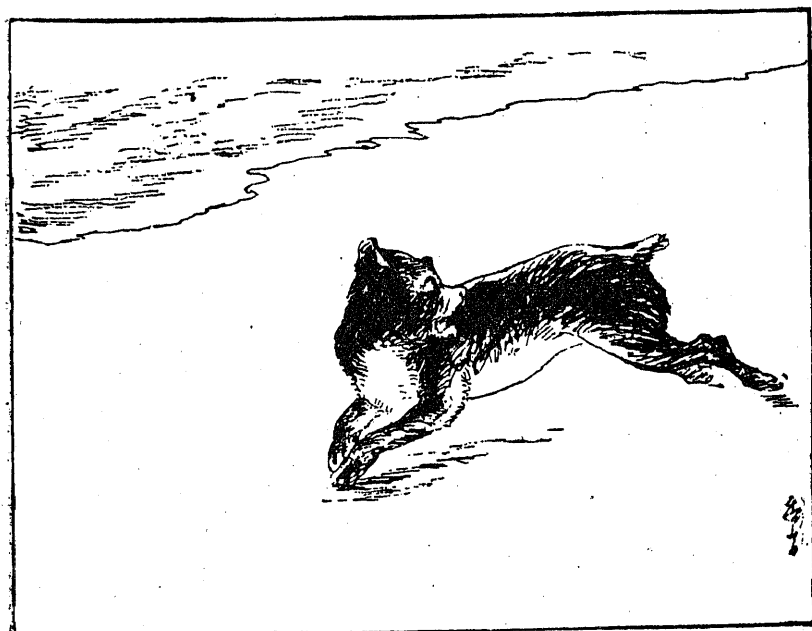
「おほい く ウダツやあ く」と呼

びましたか

ウダツは平氣で、

「なに構ふものか、もーあんなひと
い家に居るのは嫌やだ」と獨り言云
ひながらどんく海の上をかけて
行き、やがて精作が砂の上に來て
ほんやり立って居るのを振りかへ
りながら、

「もーウダツは上らないよ」と云ふ
て行ってしまひましたが、夫から間



もなく精作はだんく貧乏になって行つて、今度はもうウダツが居ませんから、いくらぼんくと手をたゝいても、何も出て来ませんで、とうく一文なしになってしまひましたとさ。

(おしまひ)



念^{ねん}しろ、

十

かく思^{おもひ}のまゝに野良猫^{のらねこ}そのほか眷族^{けんぞく}ども残^{のこ}らず退治^{たいち}して、其^その首^{くび}を車^{くるま}に載^のせて、もちかへりけり、これよりして家内^{かない}穢^{きた}かになり、大黒天王^{だいこくおう}の御威光^{おゐこう}あらはれ、白鼠^{しろねずみ}ども豊^{ゆた}かにまもりて、その家榮^{いへさか}えけり。

されば、白鼠^{しろねずみ}ども、この年^{とし}ふりし野良猫^{のらねこ}をやすくと退治^{たいち}したりしも、「大黒天^{だいこくてん}の御^おかげ天祐^{てんゆう}のいたす處^{ところ}と御禮^{おれい}まゐりに行き、おみきおそなへをあげて、御禮^{おれい}を申上^{まうし}げけり、

〔大黒天^{だいこくてん}〕これからも、猫^{ねこ}がゐぬとて、ゆだんせぬやうにしやれ。

